［シンポジウム3］

呉秀三先生と周辺の人びと

岡田　靖雄
青柿舎（精神科医療史資料室）

1986年第87回総会では富士川英郎先生およびわたしが，それぞれ富士川游先生および呉秀三先生について特別講演した．今回も，ご子息とはいえ富士川先生とわたしとが，おなじ主題で報告することになった．ともかくも，前回とはなるべく内容がかさならぬように報告したい．

呉家の旧姓は山田．山田家は先生の3代前から呉にすんでおり，呉市下山田町7-13に呉家旧居跡の標識がたっている．父山田黄石は，呉の地名から呉氏を名のることにした．呉少年はこの姓のためにからかわれた記憶をもっている．父は江戸遊学中に淺野家支藩主の侍医となり青山藩邸内にすんでいた．

先生は1865年3月14日（元治2年2月17日）江戸青山穏田の淺野家下屋敷にうまれた．呉一家は1867年に江戸をたって，青山侯の陣屋のある吉田（広島市から北北東に45 km）についた．吉田の北部には，かつて毛利家の居城があった郡山がある．呉一家がしばらくすんでいた浄国寺の建て物は1980年当時のこっていた．先生が吉田にいたのはほぼ満5歳までであるが，郡山は先生の脳裏にきざみこまれていて，書斎を郡山楼と名づけたこともある．呉一家が上京したのは1872年である．

先生の帝国大学医科大学卒業は1890年（明治23年）である．同級には近藤次繁，土肥慶藏，森篤次郎がいた．篤次郎の兄森林太郎とは1883年にしりあった．森の“統計論争”は，先生の訳文「医学統計論」がきっかけであった．同郷の富士川游先生としりあったのは，1888年末か翌年はじめであったろう．

卒業後榊俶の精神病学教室にはいり助教授となった先生は1897年8月に留学に出発した．このときの送別文集には正岡子規が，“瓜なすびいのちがあらば三年目”の句をよせている．留学中に先生は，ウィーンのオーベルシタイナーから巨視的脳解剖学・病理学を，ハイデルベルクのクレペリンから精神病学の体系を，ニスルから神経細胞の染色法をまなんでいる．帰国前ロンドンによったときは，1901年8月に夏目金之助にみおくられた．

1901年10月に帰国した先生は東京帝国大学医科大学教授に任ぜられ，東京府巣鴨病院（→東京府立松沢病院）の医長（→院長）を嘱託された．榊は39歳で早逝したので，先生は日本精神病学の“Begruender”（齋藤茂吉）と称されるにいたった．精神病学者としてのその業績は，第1にクレペリンの精神病学体系を日本に根づかせたことである．また内科学（神経病学）の三浦謹之助とともに1902年に日本神経学会（→日本精神神経学会）をおこした．東京府巣鴨病院は無拘束制をもって運営し，作業治療を大幅に導入した．さらに1902年に，精神病者への救援組織として精神病者慈善救治会（→救治会）を組織し，精神衛生の啓蒙にもあたった．

前回の報告では，この救治会の活動がまだよくみえていなかった．精神病者はいれないという空気のつよかった本郷構内に1916年に精神病室をつくったのは，救治会の寄付による．関東大震災後には，松沢病院構内に臨時の救護所をつくり，お茶の水で無料診療をおこなった．さらに，今日いうリハビリテイション施設を企画し，建て物はできたが認可をえられなかった．精神病者慈善救治会は，日本における最初の精神衛生団体とみなされているが，むしろ精神病者のための社会事業団体であった．

先生は精神病者治療のあり方を熱心にといた．1900年の精神病者監護法は，精神病者の私宅監置を公認していた．先生は教室員に各地におけるその実態を調査させて，1918年には樫田五郎とともに「精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的観察」の論文を発表して私宅監置制度をはげしく批判し，“我邦十

何万ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ，此邦ニ生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ”との，過激ともいえることばをはいた．この論文がわすれられていたことには，日本の精神医学の体質をみることができる．

学生時代の先生は歴史の道にすすみたかったが，数代つづく医家をつがざるをえなくなった．助教授になるとき歴史への志は一旦たったものの，歴史はすてきれなかった．富士川先生とともに，あるいは単独で多くの論文をかき本をあらわした．それらのなかに，富士川先生と共選の『東洞全集』（1918年）もある．そのなかの「吉益東洞先生」の別刷りの“校本”とあるのをみると，17ページにわたる訂正・追加がある．先生は，富士川先生が中心の私立奨進医会，芸備医学会に協力して事にあたった．奨進医会が発展する形で，1927年（昭和2年）にこの日本医史学会が創立されたときは，先生はその理事長におされた．

先生は1925年（大正14年）に東京帝国大学教授を停年退職し，また松沢病院長を依願免職となった．大著『シーボルト先生其生涯乃功業』第2版を出版．退官後の先生は医学史に没頭するとともに，前述の救治会の仕事（治療部の外来，収容所の建設）に力をいれていた．

広島県出身で先生に関係ある精神病医としてまず名をあげるべきは尼子四郎（1865–1930）である．山県郡の生まれで，広島医学校では富士川先生と同級で首席卒業．開業医として名声を博していたが，1904–06年と巣鴨病院医員，1907–12年には先生が創立した音羽養生所院長．1897年には先生の求めに応じて出生地の犬神の概況をよせたが，これには犬神持ちとされる家の分布をしめす詳細な地図がつけられている．尼子はまた夏目金之助家の家庭医で，夏目の精神状態が悪化したときは，尼子を通じて先生の診察をうけている．

杉江董（1880–1923）は広島市外大寺村にうまれ，1907年京都帝国大学福岡医科大学を卒業．1909–15年巣鴨病院医員．1915年警視庁嘱託医→技師．『犯罪と精神病』（1912年），『犯罪精神病概論』（1930年）の著あり，1913年には寺田精一文学士とともに日本犯罪学会をおこした．杉江は日本の犯罪精神病学をおこした人である．そして，戦前から戦後にかけて犯罪精神医学の学問的水準をおしあげた吉益脩夫（1899–1974）は，くしくも吉益東洞の7代目にあたる．

現在は前頭側頭葉変性症にいれられている，初老期認知症の代表であるピク病の病理組織像をドイツのシパツとともに確立した大成潔（1885–1939）は広島県出身で，呉家の書生をしていたこともある．1909年東京帝国大学医科大学を卒業，1910–11年と巣鴨病院医員，1917年から南満医学堂（→満州医科大学）教授だった．1911–13年と巣鴨病院医員であった武田全一も広島県出身である．

呉秀三先生は1932年（昭和7年）3月26日になくなられた（67歳）．その没後50年記念会は1982年3月24日におこなわれた（小川鼎三会長）．記念会はこの機に多磨墓地の呉家墓所に記念碑をたてた．そこにいれた“伝記も著作も，世上の褒貶も結局に於て父の恃むところではなかつた．瘋癲者に対する心遣ひと，先哲の徳を恢めることこそ，その業であり志であつたと推すべきものがある”の文章は息茂一氏（西洋古典学者）のものである．この記念事業には広島県医師会および呉市医師会幹部から多額の会費をいただいた．

わたしたちがほりだした“此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ，此邦ニ生レタルノ不幸”の語は今，“二重の不幸”として障害者運動の旗印となっていることを，先生ならびに皆様にお伝えして，この報告をおわりたい．